日本にやって来たモーツァルト!?
——日本のモーツァルト百面相を語る——

Ⅰ.《魔笛》の王子タミーノは日本人

Ⅱ. 日本で初めて鳴り響いた曲は？

Ⅲ.『小学唱歌集』に顔見世のモーツァルト

Ⅳ. 日本のモーツァルト変幻 ——日本のモーツァルト変奏曲を聴く——

Ⅴ. 日本のモーツァルトの今 ——ポスト・アマデウス——

Ⅵ.〈モーツァルトは鏡〉

ヨーゼフ・ランゲ作モーツァルト像（一七八九年頃未完）

4 モーツァルト、日本に来る

海老澤　敏著「モーツァルトの回廊」（春秋社・二〇〇八年）

「モーツァルト、日本に来る」――こう今夕のレクチャー・コンサートは謳われている。このタイトルを字義通りに、というか、生身の十八世紀人だったヴォルフガング・アマデー・モーツァルトが生前、はるか極東の日本を訪れたことがあるなどと信じる者は一人もいないことは確実である。

だが一方でモーツァルトの最後のオペラ作品、名高いドイツ語歌劇《魔笛》K六二〇の冒頭で大蛇に追われた王子タミーノが「華美な日本の狩衣を身に纏って」岩山を駆け下って来るとト書にあるのも、大方の皆様はご存知だろう。つまりこのト書では、王子タミーノは、なんと日本の皇子（プリンツ）ということになる。この物語の設定を信じるとすれば、タミーノは東洋も東洋、極東の日本の皇子であって、彼は日本からはるばる西方の国、エジプトあたりの中近東まで、あるいはさらにヨーロッパ、すなわち西洋にまでやって来たということになるのだ。

こうした論議は、結構かまびすしいもので、大体モーツァルトが台本のト書自体をどう理解していたものか、はっきりとは見極めがたいように思われる。『新全集版』に採録されたものには"javonisch"（ヤヴォーニッシュ）とあるが、同年ヴィーンで初演（一七九一年九月三十日）に先立って刊行された台本初版（ヴィーン、イグナーツ・アルベルティ刊）には"japonisch"（ヤポーニッシュ）とある。後者は明らかに「日本の」という意味のjapanisch（ヤパーニッシュ）と読めるが、javonischはどうだろうか？　これはjavanisch（ヤヴァーニッシュ）、すなわち「ジャワの」とも読めないだろうか？

私はこの疑問を、かつて一度、カトリック教会のトーマス・インモース神父にぶっつけてみた。今は亡きインモース師は言下に、いや、絶対に「ヤパーニッシュ」だと断言されたものだった。

だが、私には私なりの理由があったのだ。モーツァルトが青春の旅、マンハイム・パリ旅行中、マンハイムで出会ったフェルディナント・ドゥ・ジャン（ドゥジャン）なる人物はフルートを能くする愛好家で、モーツァルトは彼のためにフルート協奏曲やフルート四重奏曲をいくつか書いているが、そのドゥ・ジャンは東インド会社に勤めた医師で、バタビア（ジャカルタ）を中心に活動していた。したがってジャワ王国のことなどが、この知人との間で話題にもなったかもしれない。あまつさえ、ドゥ・ジャンは一七八〇年代に入ったあたりでヴィーンに定住し、一七九七年同地で死去しており、記録資料は残されていないが、あるいはモーツァルトとこの楽都でも接点があったと考えられないこともない。

加えて、ザルツブルクという教会小国家では宗教劇のジャンルで学校劇などが盛んに試みられていた。その題材として、イエズス会による東洋の、そして日本のキリスト教布教と殉教の物語がしばしば取り上げられ、かつ、モーツァルトの親しい友、ヨーゼフ・ハイドンの弟ミヒャエルは一七七〇年にラテン語劇《敬虔なキリスト者》を作曲、これは一七七四年にドイツ語版も上演されており、《ゆるぎないキリスト教徒ティトゥス》と名づけられた。残念ながら、ミヒャエル・ハイドンの音楽は失われてしまったが、モーツァルトがこの作品を知っていたことは彼のユニークなオラトリオ《救われたベツリアの町》K一一八の最後の独唱と合唱、第十六曲〈偉大なる神をほめたたえよう〉の中で、ミヒャエルのこの作からの引用をおこなっている事実から確認することができる。とすればモーツァルトはミヒャエルの作品を通じて、日本のカトリック教徒の決然たる殉教行為を、そして日本での特異な布教活動についてもなにがしかの知識を持っていたことが推測されるのである。

《魔笛》に登場する王子タミーノはひょっとして日本の出身として位置づけられるかもしれないとは、かつてモーツァルトは日本の「に」の字も知らなかったと信じて来た私にとっては大きな考え方の転換であろうか。しかもモーツァルトが、私たちの知っているようなかたちではないが、日本における切支丹伴天連（キリシタンバテレン）の普及、すなわち伝道の経緯、そして邪教の極印を押されての禁教と弾圧迫害、そして殉教まで知っていたとすれば、私たちにとっては彼に対する親近感には、思わぬ根拠や理由があったのだ。そこで私は考えたのである。こんなモーツァルトなのだから、彼が、いや、タミーノが日本に立ち戻って来てもおかしいことじゃない、と。

いや、本当に、モーツァルトは東洋の、そして、とりわけ日本の皇子、プリンスとして戻って来たのだ。時は十九世紀、慶応元年（一八六五年）、所は横浜の海岸通り、通称バンド、英国軍楽隊が隊長A・ヘネシーの指揮で《魔笛》の序曲の「ハルモニームジーク」版というか、吹奏楽の編成で野外奏楽をおこなった。ただし、これは英字新聞の予告という形で報道記事が残されており、当日雨だったら、中止という事態も生じたかもしれない。

だが、いずれにしても、これが現在までのところ、モーツァルトの曲が日本で演奏されるという最初の記録である。モーツァルトは、まず、日本に黒船に乗ってやって来たというべきだろうか。こうして明治維新、文明開化の幕が上がったが、モーツァルトが《魔笛》とともにやって来たのは、まさに彼モーツァルトが信じていたカトリックの神様の思し召しだったと言ってもよいだろう。

ところで、明治政府は新しい欧米方式の教育改革を推し進めたが、とりわけ音楽教育には途惑いを見せる。明治五年の新学制の発布には「唱歌」と呼ばれた音楽教育はまだまったく手がつけられない状態なのであった。

一八七九年（明治十二年）に文部省は「音楽取調掛」を創設する。今から見れば奇妙な名称だが「音楽研究所」という意味で、掛長の伊澤修二はアメリカはボストンから音楽教育家ルーサー・ホワイティング・メイスンを招聘し、教科書作りを試みた。その成果が明治十五年に刊行が始められる『小學唱歌集』三巻であった。その初編が刊行された明治十五年は、またメイスンが早くも離日する年で、神田昌平館で告別コンサートが催され、そこで一曲の英語の学校唱歌「Truth and Honesty」が歌われている。これこそまさに《魔笛》の第二幕で歌われる鳥刺しパパゲーノの恋人か女房欲しさの歌「娘っ子か可愛い女房が一人」の軽やかなメロディーで、なんと真面目一本槍の人生訓のテキストでおごそかに合唱されるのだ。

これは二年後の明治十七年、『小學唱歌集』第三編に「誠は人の道」として正式に採用され、文部省が少年少女たちに歌わせることでまるで道徳教育、いや修身の教科書の副読本あるいは音、声音による国家主義教育の恰好な実例とされるのだ。

その後、モーツァルトの声楽曲は日本語の歌詞をつけて唱歌、合唱曲などのレパートリーに組み込まれて行く。そして同時進行の形で、音楽取調掛から明治二十年に東京音楽学校に改組され、音楽の専門家養成が始められる。その年、取調掛伝習生が音楽演習会で弾いたピアノ曲の中に交響曲のメヌエットが記録されている。当時欧米ではこうした大編成の曲（歌劇や教会作品なども含む）のピアノや室内楽による編曲が流行していたが、その直輸入版の実例であろう。

またピアノやヴァイオリンの独奏でさまざまな曲が紹介され、当時圧倒的に多かった同時代の、すなわちベートーヴェン以降、ロマン派や国民楽派のレパートリーの演奏活動の中で、モーツァルトの曲も、次第に取り上げられる機会を増やして行くのだ。歌曲《すみれ》K四七六や《春への憧れ》K五九六が日本語の歌詞を伴なって歌われ、ポピュラリティを獲得して行く様は、まるでモーツァルトが日本に帰化した、いやそうではない、私たち日本人と同じ人間、同胞であったのを確認する思いであったというべきだろう。

そうしたモーツァルトの日本人としての存在感は昭和期に入っていや増し、第二次世界大戦前後の数多くの外来演奏家のモーツァルト演奏は、オーケストラやオペラの公演も次第に多くなる一九五〇年以降、まことに多彩なものとなって行く。いわんや日本人の演奏もまた。

日本人が抜きん出て東洋のモーツァルト国（ランド）であることの証拠は、こうしたおびただしい公演活動ばかりではない。私たちは近年、三つの〈モーツァルト祝年〉、すなわち〈生誕二〇〇年〉（一九五六年＝昭和三十一年）、〈歿後二〇〇年〉（一九九一年＝平成三年）、そして今年の〈生誕二五〇年〉（二〇〇六年＝平成十八年）を持った。とりわけ二十一世紀に入ってからの今年の祝年は、異常なほどの盛り上がりを見せている。その過熱ぶりには、しかし、いささか胡散臭さがつきまとっているのも否定できない。

ジャーナリズムの世界では新聞雑誌そしてテレビで真偽定かならぬ、否、正真正銘の偽情報が数多く紹介され、ひたすら一般読者に修正の利かない誤報をまるで真実であるかのようにイン・プットするのに汲々たる有様である。モーツァルト療法もCD本を売らんかなのビジネス臭芬々（ふんぷん）の無責任ぶり。モーツァルトさんも、今の日本には住みにくいほどの虚飾に満ちた厚化粧をさせられ、急ぎ天国に逃げ帰りたい意向を持っているのではなかろうか。

そんな有様の厄払いにお二人の日本人作曲家に登場願って、爽やかなモーツァルト調の響きでこのコンサートを閉じることにしよう。静聴、静聴！

【演奏曲目】

オペラ《魔笛》K620 序曲〔F・ブリスラー　ピアノ独奏用編曲、慶応元年〕

《Truth and Honesty》　作詞：シンドラー夫人〔"Second National Music Reader" 明治15年〕

《誠は人の道》　作詞：不詳〔明治17年『小學唱歌集』第3編〕

《アウエ、ウエルム》〔モテット《アヴェ・ヴェルム・コルプス》K618、明治20年〕

《此御山》　作詞：旗野十一郎〔明治31年〕

《上野の岡》　作詞：大和田建樹〔明治21年『明治唱歌　第2集』〕

《エー、フラット、シンフホニー中踏舞曲緒の部》ジュールホッフ編〔《交響曲第39番変ホ長調》K543第3楽章、J. シュールホフ　ピアノ独奏用編曲、明治20年〕

《トルコ國の進行曲》〔《ピアノ・ソナタ　イ長調》K331第3楽章、明治25年〕

＊

《ヴァイオリン・ソナタ　ホ短調》K304〔明治31年〕

《王政維新》　作詞：佐々木信綱〔明治39年『尋常小學唱歌　第4學年下』〕

《菫（すみれ）》　作詞：乙骨三郎〔明治40年『独唱名曲集』〕

《旋転曲（ロンド）　ト長調》〔《ハフナー・セレナード》K250第4楽章、F. クライスラー編曲、大正12年〕

《五月の歌》　作詞：薄柳善吾〔昭和22年『6年生の音楽』〕

中田喜直《海ほおずきと少年》　作詞：岸田衿子〔昭和41年作曲「日本のおもちゃうた」第4曲〕

湯山昭《小鳥になったモーツァルト》〔平成2年作曲〕

【演奏】

ピアノ：木村徹

ヴァイオリン：植村理菜　ピアノ：花岡千春

ソプラノ：松田晶恵　メッゾ・ソプラノ：佐藤まどか

テノール：田中誠　バリトン：塚田康弘

ピアノ伴奏：神保道子

◉2006年9月15日　旧東京音楽学校奏楽堂

モーツァルト作曲　ドイツ語歌劇 <<魔笛>> K620

初演　[1791年9月30日]

Die Zauberflöte.

Eine

große Oper in zwey Aufzügen.

Von

Emmanuel Schikaneder.

Die Musik ist von Herrn Wolfgang Amade Mozart, Kapellmeister, und wirklichem k. k. Kammer-Compositeur.

Wien,
gedruckt bey Ignaz Alberti, 1791.

第1幕　第1場　冒頭のタミーノ　（1796年）

<<魔笛>>　初版台本（エマーヌエル・シカネーダー作）　第1幕　冒頭

対訳　海老澤　敏"

Erster Aufzug

Das Theater ist eine felsige Gegend, hie und da mit Bäumen überwachsen; auf beiden Seiten sind gangbare Berge nebst einem runden Tempel.

第1幕

舞台は岩山の風景。ここかしこに樹々が繁っている。両側には道のついた山があり，かたわらに円形の宮殿がある。

Erster Auftritt

Tamino kommt in einem prächtigen javonischen Jagdkleid von einem Felsen herunter, mit einem Bogen, aber ohne Pfeil; eine Schlange verfolgt ihn.

第1場

タミーノがきらびやかな日本の狩衣をまとって，岩山のひとつから駆けくだってくる。手には弓を持っているが，矢はない。蛇が彼を追いかけてくる。

TAMINO Zu Hilfe! Zu Hilfe! Sonst bin ich verloren, *Nr. 1: Introduktion*
Der listigen Schlange zum Opfer erkoren.
Barmherzige Götter! Schon nahet sie sich!
Ach rettet mich! Ach schützet mich!
(Er fällt in Ohnmacht; sogleich öffnet sich die Pforte des Tempels, drei verschleierte Damen kommen herein, jede mit einem silbernen Wurfspieß.)

タミーノ　助けてくれ！　助けてくれ！　さもないとやられてし　第1番
悪い蛇の犠牲になってしまう。　しまう。　導入
慈悲深い神々よ！　もう蛇が近づいてきます！
ああ救って下さい！　ああ，守って下さい！
（彼は気絶して倒れる。すぐに宮殿の門がひらかれ，三人のヴェールをかぶった女が出てくるが，それぞれ手に銀の投槍を持っている）

Tamino kommt in einem prächtigen japonischen Jagdkleide rechts von einem Felsen herunter, mit einem Bogen, aber ohne Pfeil; eine Schlange verfolgt ihn.

Tamino kommt in einem prächtigen javonischen Jagdkleide rechts von einem Felsen herunter, mit einem Bogen, aber ohne Pfeil; eine Schlange verfolgt ihn.

「ジャパン・タイムズ」紙デイリーアドヴァタイザー（広告版）慶応元年８月27日（1865年）

国立国会図書館所蔵

THE JAPAN TIMES'
DAILY ADVERTISER
VOL. I—NO. 13]　YOKOHAMA, WEDNESDAY, SEPTEMBER 27TH 1865.　[PRICE $2 PER MONTH

海老澤　敏　著　『滝　廉太郎 - 夭折の響き - 』
（岩波新書九二一　二〇〇四年）

たとえばモーツァルト。日本でおよそモーツァルトの曲が具体的な曲名とともに演奏されるという最初の記録は、当時の英字新聞『ジャパン・タイムズ・デイリー・アドヴァタイザー』の一八六五年（慶応元年）九月二十八日号に予告されたものであろう。これは翌々三十日に横浜外人居留地、通称〈バンド〉（海岸通り）と呼ばれる界隈で英国陸軍軍楽隊がおこなうコンサートの中で、楽長ヘネシーの指揮によって、モーツァルトの傑作ドイツ語オペラ『魔笛』（K六二〇）の序曲が演奏されるというものであった。

幕末期のモーツァルト

またアルジャーノン・バートラム・ミットフォード著『英国外交官の見た幕末維新』（長岡祥三訳、新人物往来社、一九八五年）には、以下の一文が見られる。

「私の古い友人のデシャルム将軍は、当時大尉で、騎兵将校であったが、着任の時、グランド・ピアノを持ち込み、ベートーヴェン、モーツァルト、ショパンなどのあらゆる曲を弾きこなした。彼は優れた音楽家であったと同時に、第一級の軍人でもあった」。

残念ながらミットフォードはいずれの作曲家の作品も特定してはいないが、こうした演奏が限られたサークルの中でおこなわれたのは、一八六七年（慶応三年）のことであったと思われる。

日本人による演奏

それでは日本人の手でモーツァルトの名を伴った曲が実際に演奏されるという最初の公式の記録は、いつのことであったろうか。それは前述の二つの記述からおよそ二十年ほど隔たった一八八七年（明治二十年）のことである。

この年十月、現在の東京芸術大学音楽学部の前身に当たる東京音楽学校が設立され、専門の音楽家の養成を目指しての専門教育が開始されたが、この東京音楽学校の前身に当たる音楽取調所が七月九日に催した〈音楽演習会〉、すなわちコンサートのプログラムには、次のような曲名が記されている。「モザート作、エー、フラット、シンフホニー中蹈舞曲躰（とうぶきょくたい）の部。山田源一郎　ジュールホッフ編」。これは推定するところ、モーツァルトのシンフォニー、おそらくは疑いなく『交響曲　変ホ長調（第三十九番）』（K五四三）のメヌエット楽章をユーリウス・シュールホフなる作曲家・ピアニストが独奏ピアノ用に編曲した版を取調所生徒の山田源一郎が弾いたものであった。

こうしたシンフォニーやあるいはオペラでさえ、十九世紀には独奏ピアノ用、連弾ピアノ用、二台のピアノ用、さらには弦楽四重奏用といった多様な編曲が試みられていたドイツなどヨーロッパから、あるいはアメリカから輸入され、ようやく始められた日本での演奏会活動で、取り上げられたものであったろう。

このモーツァルトの二つの作品が、一つは横浜、もう一つは東京で紹介された一八六〇年代から八〇年代にかけての四半世紀に、西洋音楽は、まさに次第に滔々たる流れを成して、日本に移入されたのだ。いくつもの支流にも分かれつつ。

齋藤　龍　著　『横浜・大正・洋楽ロマン』
（丸善ライブラリー　六四〇　一九九一年）

耳による楽しみ、それは軍楽隊から始まった。オペレッタ、室内楽、歌、合唱へと、さまざまな人の輪を作った。ペリーがもたらし、浮世絵師も耳にしたであろう吹奏楽、一八六五年になると、英字新聞（ジャパンタイムス・デイリー・アドヴァタイザー）に、その演奏曲目が載るようになる。六四年一一月に開場したロイヤル・オリンピック劇場という、名前は立派だが、改造して人の集まれるようになった建物で行われた芝居の伴奏や、海岸通り（Bund）の野外演奏に、イギリス第二〇連隊軍楽隊が活躍した。海岸通りでの軍楽隊の野外演奏は、毎週金曜とか土曜の四時半から始まった。この第二〇連隊は、一八六四年に横浜に駐屯したイギリスの最初の大部隊である。居留民の保護が目的であったが、このように心の楽しみを与えることもその役目のひとつであった。

ヘネシー指揮のイギリス第20連隊軍楽隊の海岸通り演奏の記事．モーツァルトの魔笛序曲がある．おそらく，日本で初めて鳴ったモーツァルトであろう（「ジャパン・タイムス，デイリー・アドヴァタイザー」1865年９月26日）（国立国会図書館蔵）

51

By the kind permission of Colonel Browne and Officers the Band of H. M.'s 2d Batt. 20th Regt. will play, weather permitting, on the Band on Friday at 4.20 P.M.

PROGRAMME.

1	Overture	Die Zauberflote	Mozart
2	Quadrille	Minstrel's Songs	Kuhner
3	Valse	Song of the Wood	Tinney
4	Selection	Fra Diavolo	Auber
5	Galop	Submarine	D'Albert

GOD SAVE THE QUEEN.

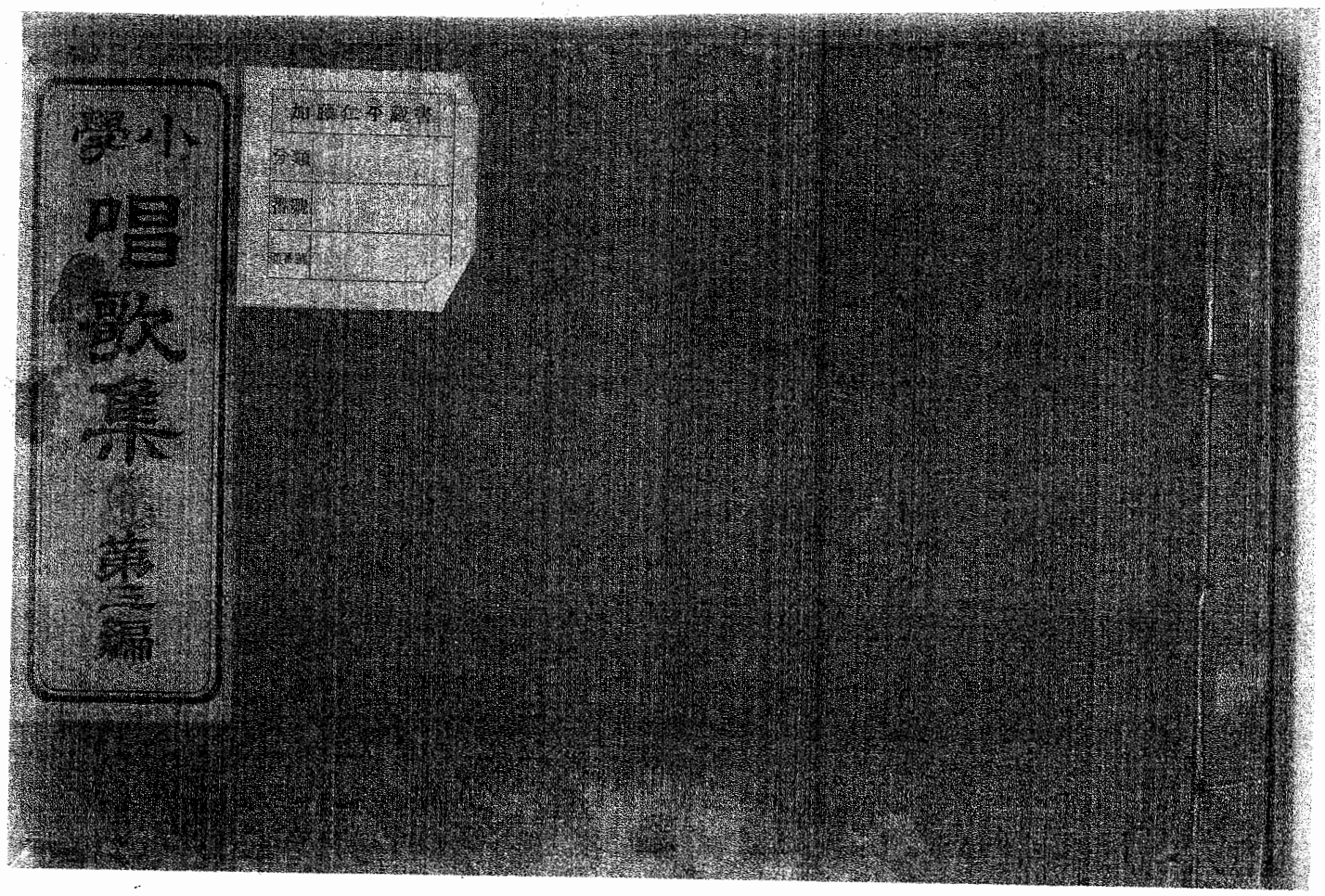
A. HENNESSY,
Conductor.

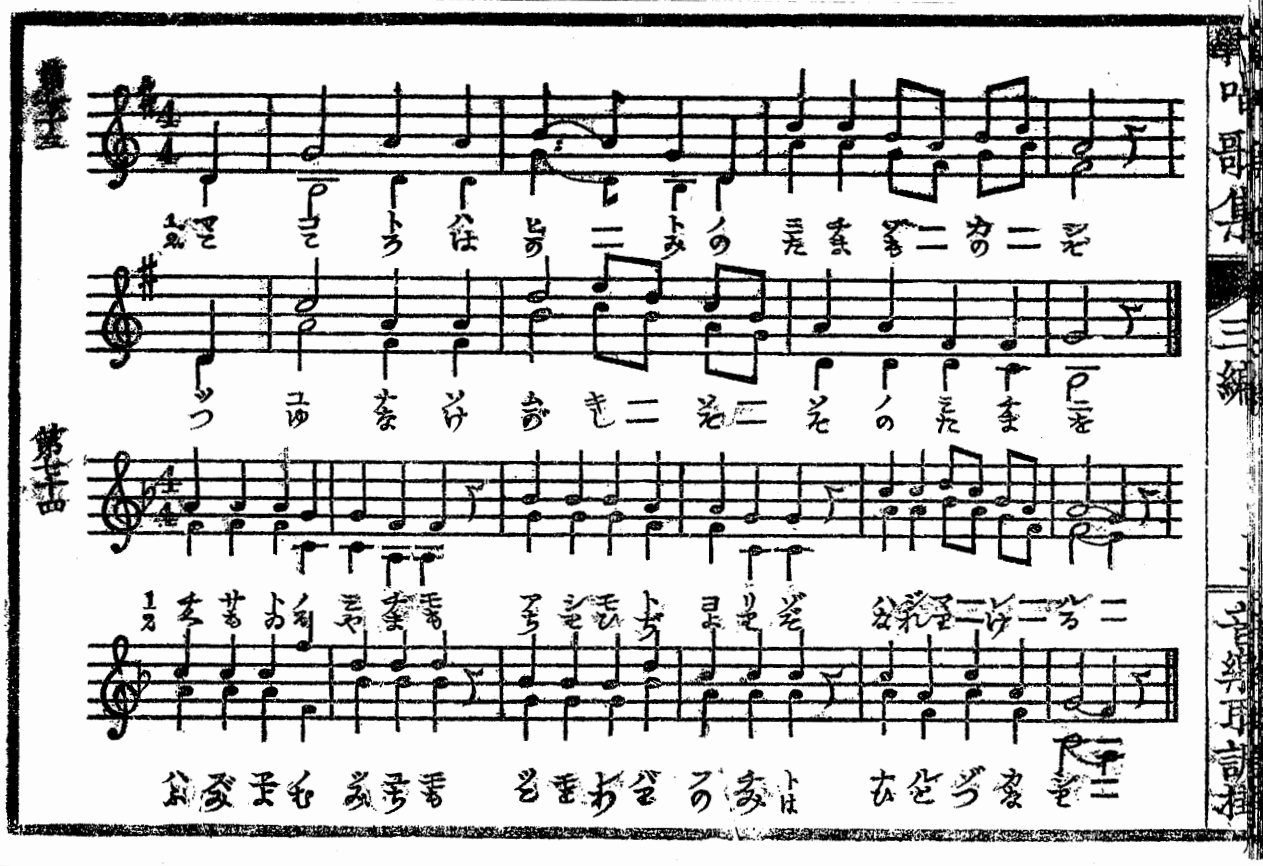
CHURCH NOTICES.

CHRIST CHURCH:—

Divine service is celebrated every Sunday at 11 A.M., and 4 P.M. Special Service for Garrison at 7 A.M. The Holy Communion is administered at the Morning Service of the principal Church Festivals, and also on the first Sunday of every month.

文部省刊行　『小学唱歌集　第三編』（明治 17 年 3 月刊行）[海老澤　敏所蔵]



第 73 曲　『誠は人の道』

台本作者　エマヌエル・シカネーダ扮するパパゲーノ

538. Rollenbild daraus: Schikaneder als Papageno. Stich von Ignaz Alberti / Costume-Design from the same: Schikaneder as Papageno. Engraving by Ignaz Alberti.

対訳：　海老澤　敏

Juhe! Da ist er schon!
(Trinkt.)
Herrlich! – Himmlisch! – Göttlich! – Ha! Ich bin jetzt so vergnügt, daß ich bis zur Sonne fliegen wollte, wenn ich Flügel hätte. Ha! Mir wird ganz wunderlich ums Herz! Ich möchte – ich wünschte – ja, was denn?
(Schlägt das Glockenspiel.)
Ein Mädchen oder Weibchen　　*Nr. 20: Arie*
Wünscht Papageno sich!
O so ein sanftes Täubchen
Wär' Seligkeit für mich!
Dann schmeckte mir Trinken und Essen,
Dann könnt' ich mit Fürsten mich messen,
Des Lebens als Weiser mich freun
Und wie im Elysium sein.

愉快愉快！　もう出てきたな！
（飲む）
すばらしいね！――すてきだね！――みごとだね！――ハハ！おれはいまたいそう満足で，翼がありゃお日様までも飛んでいきたいものですよ。ハ，ハ！　まったくすてきな気持になってきましたぜ！　もしできりゃあ――もしできりゃあ――え，なんだって？

（グロッケンシュピールを叩く）
娘っ子か可愛いい女房がひとり　　第20番 アリア
パパゲーノ様はほしいんだ！
ああ，やさしい小鳩がいてくれりゃ
おれはまったく大よろこびさ！

そうなりゃ飲み物，食べ物がおいしくって，
王様にだって劣りゃしない。
賢者のように生活を楽しんで，
まるで天国にでもいるようだ。

もう一つの事例を取り上げてみよう。それは『小学唱歌集 第三編』に含まれた『第七十三　誠は人の道』である。この唱歌は、唱歌集全三巻の中で、モーツァルトの旋律が取り上げられた唯一の例である。唱歌集の各曲の原曲の作曲者の名は、当然、書き出されてはいないが、そうした唱歌の戸籍は別の形で明らかとなり、この『誠は人の道』が、モーツァルトの最後のオペラ、『魔笛』(K六二〇)の第二幕の第二十番パパゲーノの愉快なアリア「娘っ子か可愛いい女房がひとり」であることが知られることとなる。

修身の副読本という性格

「一　誠は人の道ぞかし／つゆなそむきそ、其のみちに。二　こころは神のたまものぞ／露なけがしそ、そのたまを」。道徳倫理、まさに人倫を諭すこの歌詞が鳥刺し、パパゲーノの陽気な小唄のメロディーに乗って歌われる(と言っても、歌い方、テンポ、音調などはまったく異なってはいるが)奇妙な対照は、その後の日本におけるモーツァルト受容史に恰好の話題を提供しているものである。

だがここで、この『小学唱歌集 第三編』の一曲を取り上げたのはほかでもない。この唱歌が、この第三編に収録の唱歌の主流的な傾向を代表しているものだからである。『小学唱歌集 第三編』は収録曲が少なく、計十六曲に過ぎず、主要な内容は、第一編と同様、自然に関わりを持つものが多い傾向を保持している。ただ、最後に近い数曲は、天皇制とそれにもとづく国家形体(「皇御国」、治政(「栄行く御代」)そして太平の世が歌われて、私たちの注意を惹く。

そしてこの傾向が、第三編ではいちじるしく顕著となるのだ。第三編でも自然も高らかに歌われてはいく。だが、その自然讃美の歌声の中にも、(御代)との関係、神や人倫、あるいは心の在り方なども合わせて歌われるのが目立ってくる。そればかりではない。親や師の恩が讃えられ、戦士の死が追悼され、死の無情さが嘆かれ、さらには人間の努力や(学び)の重要性が強調される。歴史的な意識も取り込まれ、古の人の営みも歌われる。

こうして明治十七年に刊行された第三編は、早くも美的情操の涵養よりも、天皇制を中心とする国家の維持を最優先する人材の教育、養成に重心が移され、さながら音による、声音と言葉(歌詞)の高唱による修身の教科書の副読本の性格さえ帯びることになる。

モーツァルト作曲　歌曲＜春への憧れ＞　K596

Sehnsucht nach dem Frühlinge
リート「春への憧れ」
K.596

CD-SMZ 177

対訳：　海老澤　敏

歌詞：クリスティアン・アードルフ・オーヴァーベック

13 Komm, lieber Mai, und mache
Die Bäume wieder grün,
Und laß mir an dem Bache
Die kleinen Veilchen blüh'n!
Wie möcht' ich doch so gerne
Ein Veilchen wieder seh'n!
Ach, lieber Mai, wie gerne
Einmal spazieren geh'n!

おいで、いとしい五月よ、そして
樹々をふたたび緑にしておくれ、
そしてぼくのために、小川のほとりで
ちっちゃなすみれを咲かせておくれ！
だってぼくは本当に
すみれをもう一度見たいんだ！
ああ、いとしい五月よ、本当に
一度散歩してみたいんだ！

Zwar Wintertage haben
Wohl auch der Freuden viel;
Man kann im Schnee eins traben
Und treibt manch' Abendspiel;
Baut Häuserchen von Karten,
Spielt Blindekuh und Pfand;
Auch gibt's wohl Schlittenfahrten
Aufs liebe freie Land.

冬の日々にだってもちろん、
楽しいことはたくさんあるんだ。
雪の中をかけまわり、
晩の遊びもたくさんできる。
カードでちっちゃいお家を作り、
目隠しごっこや罰金遊びもできる。
それに橇乗りだってあるし、
大好きな広い野原にも出られる。

Doch wenn die Vöglein singen,
Und wir dann froh und flink
Auf grünen Rasen springen,
Das ist ein ander Ding!
Jetzt muß mein Steckenpferdchen
Dort in dem Winkel steh'n,
Denn draußen in dem Gärtchen
Kann man vor Kot nicht geh'n.

でも、小鳥たちが歌い、
ぼくたちも楽しく、すばやく、
緑の芝草の上でとびはねることになれば、
それは別のことだ！
今、ぼくのお馬〔馬首のついた玩具〕は
あそこの隅においておかなけりゃいけない、
外のお庭はぬかるみで、
出ていくことはできないから。

小林秀雄「モオツァルト」『創元』第一輯
（昭和 21 年）　[海老澤　敏　所蔵]

文部省唱歌集「六年生の音楽」作詞　青柳善吾
（昭和 22 年）
[海老澤　敏　所蔵]

五月の歌

作詞　青柳善吾
作曲　モーツァルト

著作権に配慮し非公開と致します。

"*Song of May*", adaptation of Mozart's Lied "*Sehnsucht nach dem Frühlinge*" K.596 in "*School Song Book*" Vol.6, ed. by Ministry of Education, 1947.

スタンダアルは、モオツァルトの音楽の根底は tristesse（かなしさ）といふものだ、と言つた。定義としてはうまくないが、無論定義ではない。正直な耳にはよくわかる感じである。浪漫派音楽が tristesse を濫用して以來、スタンダアルの言葉は忘れられた。tristesse を味ふ爲に涙を流す必要がある人々には、モオツァルトの tristesse は縁がない様である。それは、凡そ次の様な音を立てる、アレグロで。（ト短調クインテット、K. 516.）

ゲオンがこれを tristesse allante と呼んでゐるのを、讀んだ時、僕は自分の感じを一と言で言はれた様に思ひ驚いた。（Henri Ghéon, Promenades avec Mozart）確かに、モオツァルトのかなしさは疾走する。涙は追ひつけない。涙の裡に玩弄するには美しすぎる。空の青さや海の匂ひの様に、萬葉の歌人が、その使用法をよく知つてゐた「かなし」といふ言葉の様にかなしい。こんなアレグロを書いた音楽家は、モオツァルトの後にも先にもない。

モーツァルト劇「アマデウス」を見て——凡人による神への復讐劇——

音楽評論家・国立音楽大学長・海老沢　敏

著作権に配慮し非公開と致します。

主役は宮廷楽長サリエリ

ピーター・シェファーのモーツァルト劇『アマデウス』は、二年半前にロンドンの国立劇場で初演されて以来、欧米主要都市の主要劇場の舞台を文字通り席巻してきた。そして今、東京は池袋のサンシャイン劇場でロンドン初演時の演出家ピーター・ホールの助手だったジャイルス・ブロックの演出、倉橋健、甲斐万理江の訳で上演されている。

劇の進行の立役者は、父親のレオポルトから、いな神から「神に愛される者（アマデウス）」の名を得た、ほかならぬモーツァルト（江守徹）ではない。十九世紀の二〇年代に、精神に異常をきたし、自分がモーツァルトに毒を盛って殺したのだと告白したと噂（うわさ）され、当時、ヨーロッパ中の話題となった往時のウィーン宮廷楽長アントーニョ・サリエリ（松本幸四郎）なのだ。

老境のサリエリが「未来の亡霊」である観客の前でナイトキャップや部屋着を脱ぐと、時は一挙に変転して一七八〇年代のウィーン。そのサリエリが私たち「未来の亡霊」の前で披露してくれるのはいったいなんなのだろうか。

さる男爵夫人邸に姿をみせるのは、ザルツブルク大司教と大喧嘩（けんか）をして飛び出てきたモーツァルトである。だがそれは颯爽（さっそう）とした青年音楽家と思いきや、恋人コンスタンツェ（藤真利子）と四つんばいになって鼠（ねずみ）ごっこで遊びたわむれる猫なのだ。

その彼の口からとめどなく流れ出てくる言葉や擬音は「ウンコ」、それに「オナラ」であり、父親の反対を押し切っての結婚後のシーンでも「しゃんと立つ」だの「ちゃんとできる」だのといった猥褻（わいせつ）な表現なのだ。

そんなモーツァルトの様子をつぶさに眺めているサリエリだが、その彼の耳に聞こえてくる、この「きたならしいけだもの」が作曲した十三管楽器のためのセレナードのアダージョは、まこと魂を震撼（しんかん）させる「神の声」であった。

神に帰依し、神の栄光をたたえて孜々（しし）として音楽の道に精進してきたサリエリ。だが神は、彼にはこんな天の賜物を与えてはくれなかった。この舞台でサリエリが描いてみせるのはまさにモーツァルトを没落させることで果たそうという、凡人による神への復讐（ふくしゅう）

劇なのだ。

宮廷での夫の仕事を乞（こ）うコンスタンツェは、サリエリに身をまかせようと彼の前で胸をはだけ、太股（ふともも）までひらいてみせる。『後宮』、『フィガロ』とウィーンで書いたオペラをめぐって陰謀が渦まき、そしてサリエリは一作ごとにさらに深く魂をゆさぶられる。

行き着く先は、フリーメイスン結社の秘儀をドイツ語オペラの題材とさせることで、パトロンの男爵を怒らせ、心身ともに疲れ果てたモーツァルトの書斎の窓辺に、灰色の服を着て毎夜たたずむことで、彼の死を決定づけることだった。

父親へのコンプレックス

さらにそれに縦糸のように織り込まれているのは、父親レオポルトに対する心理的なコンプレックスである。彼の劇作品の中で父親像が重要な役割を果たしているとするのは近年の論者が指摘するところでもある。死に瀕（ひん）したモーツァルトが叫ぶ「パパ！」の言葉も、私たちに強烈な印象を与えるが、そうした精神分析的要素とともに、私たちを深い思いへと誘ってくれるのは、灰色の服をまとって最後に立ち現れた使者ことサリエリに、神様はどう思っているのかと問う場面（第二幕第十五場）だろう。

サリエリはなんと『レクイエム』の楽譜を千切って食べはじめ、言うのだ。自分が食っているのは神が与えてくれたものであって、神が与える毒を一服、また一服と一生くらっていくのだ。自分もお前アマデウスもふたりとも毒を盛られたのだ。自分にはお前という毒、お前には私という毒。この時、彼は仮面をはぎ、モーツァルトの前に素顔をみせる。

だが、モーツァルトが音楽家として不滅の名を得たことを知る老年のサリエリは、自分がモーツァルトを毒殺したと自白したとの噂を流すことで、モーツァルトとともにその名が、よしんば悪名であろうと、不滅となるのを狙うのだ。そしてそれが神でさえ妨害できないことを知って、たからかに笑い、喉（のど）をかき切る狂言を演じるのである。

シェファーの劇は、私のごときモーツァルト研究家からみても、近年つとに指摘され、強調されてきたモーツァルトの伝記上、性格上の問題点をまことにたくみに利用しつつ、ひとつの見事な創作劇の世界をつくり上げているかにみえる。夫の死後、コンスタンツェが彼を理想的な人間として描き、十九世紀的、アポロン的音楽家像の原型を作り上げているやり方など心憎いばかりの仕立てぶりではある。

ズバリ音楽と人間の背反

これほどまで徹底してモーツァルトの伝記研究を活用している以上、若干の点での不備は指摘できるし、また音楽の使い方、とりわけ音響効果の面で、もう一工夫があってもよかったようにも考えられるが、それはさておき、たとえばロンドン初演、とりわけモーツァルトとサリエリのゆかりの地ウィーンのブルク劇場での公演に際してあがったスキャンダル的な非難、なかんずくモーツァルトの音楽と人間との、天と地ほどのちがいと乖離（かいり）をこれほどまでにあけすけなかたちで舞台化することはないという批判はいかがなものだろうか。いかに最新の情報を咀嚼（そしゃく）消化しているにせよ、これはあくまで創作劇であるからである。

主役の三人をはじめ、全共演者のみごとな演技には、無条件で拍手喝采（かっさい）をおくりたいと思う。

（六月十九日　読売新聞夕刊掲載）

著作権に配慮し非公開と致します。

「魂の鏡」として

海老澤　敏著「モーツァルトの回廊」（春秋社・二〇〇八年）

私たちは、今、〈モーツァルト生誕二五〇年祝年〉を迎えたばかりである。私のごとき一介のモーツァルト研究者にとっても、この作曲家の楽譜や文献に埋もれた乱雑な書斎に坐している時でさえ、放送も新聞も、また雑誌や書籍などのメディアにインターネットも加わって、かまびすしいばかりの大合唱が「モーツァルト！　モーツァルト！」と謳い上げているどよめきに耳をそばだてないわけにはいかない。

コンサートもオペラも夥しい数の公演が予定されているし、またCDやDVDも、まさに溢れんばかり市場に出回り、インターネット・ショッピングでなんでも、たちどころに入手できるのが現今の状況なのである。

たしか一九九一年の〈モーツァルト歿後二〇〇年祭〉の前年から、筆者は折に触れて、新春の随想などをモーツァルトを主題として本紙（東京新聞）に書かせていただいて来た。それは私の五冊にのぼる〈モーツァルト・クロニクル〉シリーズ（音楽之友社刊）の重要な一部を形づくっているが、歿後二〇〇年をめぐるさまざまなモーツァルト現象から、一九九六年に実現したモーツァルト住家（名高いモーツァルトの生家が手狭になったため移り住んだ対岸の広い家で「舞踊教師の家（タンツマイスターハウス）」と通称される）のモーツァルト生前の姿での復元事業、さらにそれが完成した頃から始められる生誕二五〇年祝賀のプロジェクトにまで言及が及んでいる。

私も、それ以前の長いモーツァルトとの関わりは別としても、このおよそ十五年を超える歳月の中で、さまざまな活動、仕事をモーツァルトのために成し遂げて来たとの自覚と自負とがある。それには研究者としての活動のほかにも、シンポジウムやオペラ公演、講演、そして翻訳、とりわけ全六巻におよぶ『書簡全集』の友人との共訳の完成、あるいは海外の諸機関や専門家たちとの協力、コンクール、住家復元の支援といったものも含まれている。

こうして、二十世紀の最後の四半世紀には、モーツァルト研究の目覚ましい進展があり、『新全集』の完成やこの不世出の音楽家を巡る新たな知見の獲得がある。それはモーツァルトの作品のオリジナルに無限に近い響きの再現にも結びつくことで、彼の、そして彼を取り巻く十八世紀後半の音響世界、そして音楽の表現世界を演奏家、そして私たち聴き手に開示してくれることになる。

だが、その一方で、この四半世紀は、一九八〇年代に登場した映画『アマデウス』の甚大な影響下に剽軽で下品な人間モーツァルトのイメージがモーツァルト・ファンや音楽愛好家の範囲を超えて一般に驚きを与え、またそれが定着した時期でもあった。こうしてひたすらな楽しさ、陽気さが極端に強調される反面、彼の音楽はまた、近年注目を集めている音楽療法の分野でも寵児となった。それは「モーツァルト療法」とさえ名づけられ、「モーツァルト効果（イフェクト）」なる用語がさる著者によって「®」、すなわち「登記済み（レジスタード）」の記号までつけられるという事態さえ現出したのであった。

モーツァルト・グッズもまた流行したし、今なおモーツァルトの曲を聴かせて醸造したワインや日本酒、搾り取った牛乳、焼いたパンなどが広く出回っている。それどころか、ある種のモーツァルトの曲は、それがふんだんに持つ高周波の音が、心理的あるいは精神的に効果があるばかりか、生理的、肉体的にも医療効果があり、なんと聴力はともかく視力大向上、耳鳴り、頻尿が大改善、血圧も正常化するという「モーツァルト薬剤」としてCDつきで大特売中なのだ。

だが、本当にそうなのだろうか。

私には、レコード会社までが加わってのモーツァルト薬の大廉売は、病気や障害に苦しむ人たちの藁をもつかみたい気持ちを悪用する商売、まやかしに近いビジネスと感じられる。私には、モーツァルトの、夥しいがまことに多様な作品たちは、いずれも私たちが必要としている魂の薬ともいうべきものと考えられてならない。モーツァルトの音楽への真摯な接近は、私たちの魂にとって心優しい慰めであり、日々の生活や活動の糧であり、また勇気の源泉なのだ。

私は今、私たち日本人が早くも一世紀前の一九〇六年（明治三十九年）に〈モーツァルト生誕一五〇年〉を祝い、記念演奏会を催し、かつ、当時の音楽雑誌が「モーツァルト特集号」を編んだという事実を想い起こしている。また、それに先立つこと四十年ほど前、日本ではモーツァルトの音楽が初めて紹介され、以後、次第にポピュラーになって行ったことも。

それから百数十年、今なお日本はほとんど唯一の「東洋のモーツァルト国」なのだ。いろんな意味で、その真価が〈生誕二五〇年〉の今年こそ問われることになるだろう。モーツァルトは私たちの感性の、そして魂の鏡である。そのモーツァルトに、私たちは日本人の感性と魂とを持って近づこう。

（『東京新聞』二〇〇六年一月七日付）